水と信仰

●西山郷史
（県立飯田高校教諭）

切り離せない人の死と水
結界としての川
水に宿る霊力
原初的で雑多な信仰

切り離せない人の死と水

昭和四十六年夏、ある青年から興味深い話を聞かされた。彦根に近い彼の出身地滋賀県神崎郡能登川町では、今もって土葬をしているというのである。戦争まで、一部の層（神主など）において土葬が行われていた、という話は時折耳にすることがあった。しかし、合理化が急速に進行し、条例で禁止されている地方も多いのに関わらず、手間ひまのかかる土葬を、しかも、従来あまり報告例のみられなかった真宗地帯で連綿と続けている人々の気持ちを思い、感動に近いものを覚えさせられたのである。

「冠婚葬祭」というが、葬および死後の祭りはたしかに古来共同体にとって大きな出来事であった。現在、葬儀を専らとしている宗派仏教の教義をもってしては説明し得ない、

コミュニティジャーナル
いしかわ
1979.7
昭54 7 5発行

固有の共同体意識・感性というべきものが、その根底にしっかりと流れ続けている。

浄土真宗の例をとっても、葬儀の最初に唱えられる「路念仏」が、六斎念仏等で「四遍」と呼ばれる念仏芸能の節と、もとを同じくしているものと考えられ、「六道」と呼ばれるロウソクも点される。カミソリを死者にあてるにいたっては、教義では説明のつくはずもない。「四門くぐり」(四方に鳥居を建て、遺骸を担いで、ぐるぐる回す。たたる死霊が村落に戻ってこないことを意図したものと思われる)の名残りと認められる、「教」「行」「信」「證」門と書いた額を本堂に掲げる葬制も、輪島市の一部で見られる。

ともかく、私たちの心の奥底に流れつづけている世界が、時折姿をあらわすことがあり得るわけで、彼の話はそういう意味でも心をうった(関心をもって調べるようになってから、土葬地帯が意外に多いのを知ったのだが―)。

能登川集落では、近年まで墓が建てられておらず、死者を埋めるのも順ぐりであって、家ごとの区別がないということ、一まわりするにはおよそ三十三年ぐらいかかるということも話題に上った。たんなる偶然なのかも知れないが、年忌で重要な区切りとされる三十三年目に、ほぼ一めぐりするということに不思議さを覚えた。

さらに彼は、「僕らのところは水田地帯で、墓地が水田の一区画、愛知川沿いにあるよって、大雨の時なんか、死体が流れて困ることがあるんや。竹棒もって捜して歩いたこともあったわ」という。

死者が赴く所として、山や大木を媒介とした天上・海の彼方・地下の国が想定されていることは、よく知られているところである。また、火葬・土葬以外に水葬・風葬があったことも知られている。川辺や海辺の土葬を、水葬の名残りとみるかどうかは微妙なところらしいのであるが、彼の話を聞いていて、やはり水葬の名残りではないかと、フト思った。そこには、生の根源ともいうべき水の流れに乗って葬られるほど劇的なものはない、という思いを入れたのだが―。

「思い入れ」と書いたけれど、少し注意してみてみると、人の死と水とは切り離せないものとして存在していることにきづく。たとえば、全国的に、臨終をむかえた人の顔に水を吹きかけ再生を願う(魂よばい)ことが行われており、いわゆる末期の水も、本来はそういった願いのあらわれである。

真言宗檀徒等の通夜で唱えられる「西国三十三所御詠歌」は、死者が、御詠歌に送られ、次々と札所をめぐり、善根を積んで観音に導かれ極楽へ辿り着くと説明されているが(それを現世にやっておけば、善根となり、極楽往生間違いなしということになる)、この御詠歌の途中で、亡くなった人に一ぱいの水をささげる。長い道のりだから、ノドが乾くのだという。ノドが乾くから「水」――というきわめて現世的な発想の奥に、もとはもう少し「水」そのものの持つ霊的な力を認めていたのであろう。

亡くなった時ではないが、お盆で墓に水をかける習俗や、真言・曹洞宗寺院などでの洒水と呼ばれる水を丁重に扱う意識、一般家庭でも行われる正月の「若水迎え」、それの仏教行事としてスケールを大きくした東大寺修二会(お水取り)に見られる敬虔さなど、水に対する信仰は、宗教心の根底ともいうべき畏敬の心と深く結びついている。

親鸞が「鴨川の水に流すように」言ったのや、入水自殺を遂げる人が、水に対してどういう気持ちを持っていたのかは、想像すべき手段をもたないが、琵琶湖へ流れゆく死体を「水葬では?」と思ったのは、畏敬される水の流れに身を委ね葬られる水葬に対してロマンを感じてしまったせいでもある。

この「思い」には、昭和四十五年、山陰地方を旅行した際、鳥取県東伯郡東郷町にある東郷池付近で聞いた葬制の話に、なんともいえぬ気持ちを持った経験が影響していたせいでもあろう。

墓のない唯一の地区ということで訪れたように思うのだが、そこでは池に注ぐ小さな川が流れていた。その川原で火葬にしたあと、遺骨および灰を川水へ流すのである。極めて

淡々とした感じで、流す際も特別なものは用意されない。平生、農耕に用いている鍬でサッサッと流すのである。おそらく肉体と霊魂が別ものととらえる気持ちが、伝統的に人々の中に根づいている地域のせいなのだろうけれど、なんともアッケラカンとしていた。遺骨を大切にする地方に育ったものにとってはたとえようのない気持ちにさせられたものである。古くは船に遺骸を乗せ、池へ漕ぎ出しておいて魚に捧げたものといい、その時使ったものという、車のついたずんぐりとした形の舟が保管されていた。

結界としての川

川の上流、分水嶺をなす山頂には水分（みくまり）神が水の神として祀られることが多く、有名なものには、吉野水分神社がある。水の神は山の神と同じものと考えられ、能登各地で見られる、田の水口で「アエノコト」の水迎えを行うのは、山の神・水の神、さらに田の神という複雑な性格を有する祖霊神を祀るものと考えられている。

上流からは祖霊神を招き、下流へは汚れを流す。そういう意味で川の水は、浄・不浄、聖・俗の両要素を巧みに捨象し、私たちにより豊かな「生」を保障してくれていたのである。見方を変えれば、汚れを下流に流し、上流から聖なるものを迎える図式において、川を一つのサイクル、すなわち輪廻の姿として意識していたものともみなされる。

説話の中でも、上流から流れくるものは、スサノヲとクシイナダ姫の出会いとなる櫛や、桃太郎の桃のように至福をもたらすものであるのに対し、下流へは、有名な鳥取の「流し雛」や「人形」などに、身の穢れや、災厄のもとを封じ込め、災厄を流し送ろうとするものである。金沢の犀川でも、明治の終り頃まで「人形」に汚れを封じて流す風習があり、その時流した「人形」が犀星の文学碑に型どられていることは、あの碑の特異な形に関心を持った人なら御承知のことと思われる。

中世「いく川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」と無常の代名詞のように呼ばれた川。もとの水ではないが、去ると同時にやってきて、新たな生命をたえず生み出し、悠久にして人の生々流転を見つづけたのも川であった。

流れとしてではなく、村落形態の場としてみた時、川はもともと結界の場所としても最適な所であった。下流に汚れを流すことについては、前にふれた通りだが、そこには村落から異郷へ送り出すという意識も働いていたとみなければなるまい。

三途の川原や西院の川原の向う、あるいは川を越えた「彼岸」が死者の国であるのは、きわめて仏教的な発想であるけれども、川とは無縁な出雲の洞窟が、「賽の川原」と呼ばれている例など考えても、古くは生活の場とは異質の世界に、他界の代名詞ともいうべき「三途の川原」等の言葉をあててきたのであって、古くからあった異郷意識に仏教観が習合したものとみなされる。

ゴロ合わせのようで恐縮だが、人形を流す犀川が、賽の川原の「賽」と意識されていた時代があったのも否めないであろう。寺町寺院群は、前田家にとって城壁や、物見櫓（やぐら）的役割をはたしていたというのも事実だろうが、それ以前には、やはり、川を隔てて霊魂の集まる地であったと思われる。

ある時、葬制を研究している、ある大学の助教授と共に、江戸時代（江戸のいつ頃のものであったか失念したが）の京都の地図を見る機会があった。鴨川に架けられた橋は、五条の大橋のみで、あとの三条や四条の橋はいずれも舟橋であった。やけに五条大橋付近の浄土宗寺院が目についた。京都では北の舟岡山一帯、鳥辺野付近が古くからの墓地である。地図を見た助教授の見解はこうである。「鳥辺野の霊を鴨川でさえぎっているのでしょう。唯一の橋のまわりは、念仏の声で満たしておいて悪霊が入ってこれないようにする……」。説得力があった。悪霊が橋をわざわざ渡ってくるとも思えなかったが、所詮、人間の恐れが作り出したものである。水にはそういうものをもさえぎる力があるらしい。道の辻には、悪霊が村落に入ってこないように塞の神を祀ることが多いが、わざわ